

# Oracle® Solaris Studio 12.3 インストール ガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are “commercial computer software” pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

# 目次

---

はじめに .....	7
<b>1 インストールの準備 .....</b>	<b>11</b>
ソフトウェアのインストールの概要 .....	11
システム要件 .....	12
インストーラのローカル表示とリモート表示の選択 .....	14
▼リモート表示によるインストールの準備 .....	14
NFS マウントのファイルシステムへのインストール .....	15
▼NFS マウントのファイルシステムに Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインス トールする準備をする .....	16
インストール方法の選択 .....	16
<b>2 Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール .....</b>	<b>17</b>
Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール .....	17
ゾーンへのインストール .....	17
異なるアーキテクチャーのクライアントで使用するための Solaris サーバーへのイ ンストール .....	18
代替ルートディレクトリへのインストール .....	18
複数システムへのインストール .....	18
デスクトップシステムへの IDE のインストール .....	18
グラフィカルユーザーインタフェースのインストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール .....	19
GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのためのインストール .....	22
非 GUI インストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール .....	23
非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのためのインストール .....	25
必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール .....	25
開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定 .....	26
Oracle Solaris Studio 12.3 IDE の起動 .....	27

<b>3</b>	<b>Oracle Solaris Studio 12.3</b> ソフトウェアのアンインストール .....	29
	以前のリリースの Oracle Solaris Studio または Sun Studio ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール .....	29
	アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択 .....	29
	▼ リモート表示によるアンインストールの準備 .....	29
	ソフトウェアのアンインストール .....	30
	▼ GUI アンインストーラによるアンインストール .....	30
	▼ 非 GUI アンインストーラによるアンインストール .....	31
<b>4</b>	<b>トラブルシューティング</b> .....	33
	TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する .....	33
	GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する可能性がある .....	34
	インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合がある .....	34
	失敗したインストールまたはアンインストールの対処 .....	34
	アンインストーラを使用して失敗したアンインストールの対処 .....	35
	▼ Solaris プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処 .....	35
	▼ Linux プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処 .....	36
	NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する .....	36
	インストールログファイルの表示 .....	37
<b>A</b>	<b>インストーラ、アンインストーラ、install_patches ユーティリティのコマンド行オプション</b> .....	39
	GUI インストーラのコマンド行オプション .....	39
	非 GUI インストーラのコマンド行オプション .....	40
	アンインストーラのコマンド行オプション .....	42
	install_patches.sh ユーティリティのコマンド行オプション .....	43
<b>B</b>	<b>スワップ領域の追加</b> .....	45
	スワップ領域の追加 .....	45
	▼ Solaris システムでのスワップ領域の追加 .....	45
	▼ Linux システムでのスワップ領域の追加 .....	46

---

<b>C</b>	<b>Oracle Solaris 12.3</b> のコンポーネントとパッケージ .....	49
<b>D</b>	パッチの識別番号と説明 .....	53
<b>E</b>	<b>Oracle Solaris Studio 12.3</b> コンポーネントのバージョン番号 .....	55
	索引 .....	57



# はじめに

---

『Oracle Solaris Studio 12.3 インストールガイド』では、次のタスクの実行手順を説明します。

- パッケージインストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアを Oracle Solaris 10 プラットフォームおよびサポートされている Linux プラットフォームにインストールする
- 必要な Oracle Solaris 10 パッチのインストール
- 統合開発環境 (IDE) を起動する
- Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをアンインストールする

## サポートされるプラットフォーム

この Oracle Solaris Studio リリースは、Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行する SPARC ファミリーのプロセッサアーキテクチャーを使用するプラットフォームと、Oracle Solaris または特定の Linux システムを実行する x86 ファミリーのプロセッサアーキテクチャーを使用するプラットフォームをサポートします。

このドキュメントでは、次の用語を使用して x86 プラットフォームの違いを示しています。

- 「x86」は、64 ビットおよび 32 ビットの x86 互換製品を指します。
- 「x64」は、特定の 64 ビット x86 互換 CPU を指します。
- 「32 ビット x86」は、x86 ベースシステムで特定の 32 ビット情報を指します。

Linux システムに固有の情報は、サポートされている Linux x86 プラットフォームだけに関連し、Oracle Solaris システムに固有の情報は、SPARC および x86 システムでサポートされている Oracle Solaris プラットフォームだけに関連します。

サポートされているハードウェアプラットフォームおよびオペレーティングシステムリリースの完全なリストについては、[Oracle Solaris Studio 12.3 リリースノート](#)を参照してください。

## Oracle Solaris Studio ドキュメント

Oracle Solaris Studio ソフトウェアの完全なドキュメントは、次のように見つけることができます。

- 製品のドキュメントは、リリースノート、リファレンスマニュアル、ユーザーガイド、チュートリアルも含め、[Oracle Solaris Studio Documentation Web サイト](#)にあります。
- コードアナライザ、パフォーマンスアナライザ、スレッドアナライザ、dbxtool、DLight、および IDE のオンラインヘルプには、これらのツール内の「ヘルプ」メニューだけでなく、F1 キー、および多くのウィンドウやダイアログボックスにある「ヘルプ」ボタンを使用してアクセスできます。
- コマンド行ツールのマニュアルページでは、ツールのコマンドオプションが説明されています。

## 関連するサードパーティの Web サイトリファレンス

このドキュメントには、詳細な関連情報を提供するサードパーティの URL が記載されています。

---

注-このドキュメントで紹介するサードパーティ Web サイトが使用可能かどうかについては、Oracle は責任を負いません。このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、広告、製品、またはその他の資料についても、Oracle は保証しておらず、法的責任を負いません。また、このようなサイトやリソースから直接あるいは経由することで利用できるコンテンツ、商品、サービスの使用または依存が直接のあるいは関連する要因となり実際に発生した、あるいは発生するとされる損害や損失についても、Oracle は一切の法的責任を負いません。

---

## 開発者向けのリソース

Oracle Solaris Studio を使用する開発者のための次のリソースを見つけるには、[Oracle Technical Network Web サイト](#)にアクセスしてください。

- リソースは頻繁に更新されます。
- ソフトウェアの最近のリリースに関連する完全なドキュメントへのリンク
- サポートレベルに関する情報
- [ユーザーディスカッションフォーラム](#)。

# Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support にアクセスして電子サポートを受けることができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> にアクセス、または、聴覚に障害がある方は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> にアクセスしてください。

## 表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。  ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。  system%
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	system% <b>su</b> password:
<i>AaBbCc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。  この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% <b>grep '^#define \</b>  <b>XV_VERSION_STRING'</b>

Oracle Solaris OS に含まれるシェルで使用する、UNIX のデフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを次に示します。コマンド例に示されるデフォルトのシステムプロンプトは、Oracle Solaris のリリースによって異なります。

- C シェル

- `machine_name% command y|n [filename]`
- C シェルのスーパーユーザー
  - `machine_name# command y|n [filename]`
- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェル
  - `$ command y|n [filename]`
- Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェルのスーパーユーザー
  - `# command y|n [filename]`

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

# ◆◆◆ 第 1 章

## インストールの準備

---

この章には、次の情報が含まれます。

- 11 ページの「ソフトウェアのインストールの概要」
- 12 ページの「システム要件」
- 14 ページの「インストーラのローカル表示とリモート表示の選択」
- 15 ページの「NFS マウントのファイルシステムへのインストール」
- 16 ページの「インストール方法の選択」

## ソフトウェアのインストールの概要

この節では、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェア、製品シリアル番号、およびサポートソフトウェアをインストールする一般的な手順の概要を説明します。

手順	タスク	説明	参照先
1.	Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール先のシステムが、このリリースの最小ハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。	適切なパフォーマンスを得るために、システム要件に合ったシステムを使用することをお勧めします。	12 ページの「システム要件」を参照
2.	ローカル表示とリモート表示のどちらでインストーラを使用するかを決定します。	Oracle Solaris Studio ソフトウェアは、リモート表示またはローカル表示のどちらを使用してもインストールできます。	14 ページの「インストーラのローカル表示とリモート表示の選択」を参照
3.	インストール方法を選択します。	Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには、次の 2 通りの方法があります。	16 ページの「インストール方法の選択」を参照

4. Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアと必要な OS パッチをインストールします。手順に従ってインストールを行います。17 ページの「Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール」を参照

## システム要件

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのハードウェアおよびオペレーティングシステム要件は、表 1-1 に示すとおりです。

表 1-1 システム要件

	Solaris OS SPARC ベースシステム	Solaris OS x86 ベースシステム	Linux OS x86 ベースシステム	デスクトップシステム OS
オペレーティングシステム	Solaris 10 10/08 およびそれ以降の Solaris 10 OS 更新版  Solaris 11	Solaris 10 10/08 およびそれ以降の Solaris 10 OS 更新版  Solaris 11	Oracle Linux 5 および 6  Red Hat Enterprise Linux 5 および 6	Microsoft Windows XP Professional Microsoft Windows Vista SP1、Microsoft Windows 7 Professional、Ubuntu 9.10 またはそのあとの Ubuntu アップデート、Macintosh OS X 10.5 またはそのあとの Macintosh OS X アップデート  (デスクトップ ディストリビューションのインストールのみ)
CPU	SPARC システム  SPARC64 プラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム	x86 64 ビットのプラットフォームシステム
メモリー	推奨: 3G バイト  最小: 1.5G バイト	推奨: 3G バイト  最小: 1.5G バイト	推奨: 3G バイト  最小: 1.5G バイト	推奨: 3G バイト  最小: 1.5G バイト
インストーラに必要な一時ディスク容量	2G バイト	2G バイト	1.5G バイト	N/A

表 1-1 システム要件 (続き)

	Solaris OS SPARC ベースシステム	Solaris OS x86 ベースシステム	Linux OS x86 ベースシステム	デスクトップシステム OS
インストールされた製品に必要なディスク容量 (df -k コマンドを使用してディスク容量を確認)	1.76G バイト	1.52G バイト	1.43G バイト	365K バイト
スワップ領域	推奨: 2G - 4G バイト  最小: 1G バイト  システムにスワップ領域を追加するにあたっては、45 ページの「スワップ領域の追加」を参照してください。	推奨: 2G - 4G バイト  最小: 1G バイト  システムにスワップ領域を追加するにあたっては、45 ページの「スワップ領域の追加」を参照してください。	推奨: 2G - 4G バイト  最小: 1G バイト  システムにスワップ領域を追加するにあたっては、45 ページの「スワップ領域の追加」を参照してください。	N/A
オペレーティングシステム構成	Solaris 10 OS の場合: Entire Solaris Software Group Plus OEM Support、Entire Solaris Software Group、または Developer Solaris Software Group	Solaris 10 OS の場合: Entire Solaris Software Group Plus OEM Support、Entire Solaris Software Group、または Developer Solaris Software Group	Linux OS の場合: glibc.i686、glibc-devel、および glibc-devel.i686 を含む Development/Libraries Package Group	N/A

IDE、dbxtool、DLight、コードアナライザ、およびパフォーマンスアナライザを実行するには、Java SE Development Kit (JDK) 6 Update 24 以降が必要です。これらのツールを使用する予定があり、必要な JDK がない場合は、Oracle Solaris Studio のインストール後に、<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index.html> から JDK をダウンロードしてインストールすることができます。

Linux プラットフォームでは、Oracle Solaris Studio をインストールする前に Java SE Development Kit (JDK) 6 Update 24 以降をインストールする必要があります。このインストーラは、Oracle Linux および Red Hat Enterprise Linux リポジトリに含まれている OpenJDK では動作しません。

## インストーラのローカル表示とリモート表示の選択

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール中は、インストーラをローカル表示またはリモート表示のいずれかに設定できます。

- ローカル表示。ソースコンピュータとディスプレイコンピュータが同じです。GUI インストーラウィンドウまたは非 GUI インストーラのメッセージは、製品 DVD またはダウンロードファイルを含み、インストーラを実行する同じコンピュータに表示されます。
- リモート表示。ソースコンピュータとディスプレイコンピュータが別々です。ソースコンピュータに製品 DVD またはダウンロードしたファイルをセットしてインストーラを実行します。ディスプレイコンピュータは、GUI インストーラウィンドウまたは非 GUI インストーラのメッセージを表示します。リモート表示を使用してインストールする場合は、この節の以降の指示に従ってください。

### ▼ リモート表示によるインストールの準備

- 1 ディスプレイコンピュータで、コマンド行に次のように入力し、クライアントから X サーバーにアクセスできるようにします。

```
xhost + source-computer-name
```

*source-computer-name* には、ソースコンピュータ (製品 DVD またはダウンロードしたファイルを含むコンピュータ) で `/usr/bin/hostname` コマンドを実行したときに出力される名前を入力します。

- 2 ソースコンピュータにログインし、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
rlogin source-computer-name -l rootname
Password: root-password
```

- 3 ソースコンピュータで、ディスプレイコンピュータに接続されたモニターを表示先に設定します。

C シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
setenv DISPLAY display-computer-name:n.n
```

Bourne シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
DISPLAY=display-computer-name:n.n
export DISPLAY
```

Korn シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
export DISPLAY=display-computer-name:n.n
```

*display-computer-name* には、ディスプレイコンピュータで `/usr/bin/hostname` を実行したときに表示される名前を入力します。

## NFS マウントのファイルシステムへのインストール

NFS マウントのファイルシステムに Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには、NFS パーティションがマウントされている場所に関係なく、サポートされているシステムでインストーラを実行する必要があります。次の手順では、サーバーは、インストールするソフトウェアが置かれる物理ディスクのあるマシン、クライアントは、インストーラを実行してサーバーからファイルシステムを NFS マウントするマシンです。

---

注-NFS マウントのファイルシステムとして製品イメージを共有する最良の方法は、サポートされている 1 台のシステムからそのイメージをエクスポートすることです。サーバーでインストーラを実行し、ソフトウェアがインストールされているディレクトリを共有設定します。次の NFS インストール手順は、NFS サーバーが製品でサポートされているプラットフォームでない場合にのみ使用します。

---

ファイルシステムをマウントしたら、グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface、GUI) のインストーラまたは非 GUI のインストーラをクライアントマシンで実行して、Oracle Solaris Studio 製品をサーバーにインストールできます。Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストールディレクトリとして、ファイルシステムをマウントしたディレクトリを指定します。

インストーラの実行時に `--nfs-server` オプションを指定した場合、インストーラはインストールサーバーに必要な Solaris OS パッチが存在しているかどうかを確認しません。

ソフトウェアのインストールが終了すると、Oracle Solaris 10 OS が動作するあらゆるマシンで、ソフトウェアをインストールしたサーバーからファイルシステムをマウントして、ソフトウェアを実行できます。ソフトウェアを実行する各クライアントマシンには、必要な OS パッチをインストールする必要があります (付録 D 「パッチの識別番号と説明」を参照)。パッチは、`install_patches` ユーティリティを使用してインストールできます (25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」を参照)。

NFS マウントのファイルシステムにインストールされた Oracle Solaris Studio ソフトウェアをアンインストールするには、インストールに使用したのと同じクライアントマシンでアンインストールを実行する必要があります。このとき、アンインストールを実行する前にファイルシステムをマウントしておいてください。

## ▼ NFS マウントのファイルシステムに **Oracle Solaris Studio** ソフトウェアをインストールする準備をする

- 1 サーバマシンで、適切なオプションを付けてファイルシステムを共有設定します。インストーラを実行するクライアントマシンの **root** は、**NFS** ファイルシステムに対する完全なアクセス権を持っている必要があります。

```
share -F nfs -o root=client-machine,rw filesystem
```

- 2 クライアントマシンで、読み取り/書き込みアクセス権付きで共有ファイルシステムをマウントします。

```
mount server-machine:filesystem installation-directory
```

## インストール方法の選択

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをインストールするには、次の2通りの方法があります。

パッケージインストーラ、グラフィカル  
ユーザーインターフェース (Graphical User  
Interface、GUI) モード

グラフィカルユーザーインターフェースのイン  
ストーラは、一連のインストール手順ページを表示  
するインストールウィザードです。どのページで  
も、終了、前の手順に戻る、または次の手順に進む  
操作をできます。インストールディレクトリと、イ  
ンストールする Oracle Solaris Studio 12.3 ソフト  
ウェアをコンポーネント単位で選択できます。また  
は、インストーラを実行して実行時ライブラリのみ  
をインストールできます。

パッケージインストーラ、非 GUI モード

非 GUI モードのパッケージインストーラでは、暗黙  
のうちに、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのす  
べてのコンポーネントまたは指定されたコンポーネ  
ント、または実行時ライブラリのみがインストール  
されます。

# Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール

---

この章には、次の情報が含まれます。

- 17 ページの「Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール」
- 25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」
- 26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」
- 27 ページの「Oracle Solaris Studio 12.3 IDE の起動」

## Oracle Solaris Studio ソフトウェアのインストール

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアと必要な OS パッチを単一ユーザーシステムにインストールできます。また、このソフトウェアと OS パッチを、同じアーキテクチャーのクライアントシステムが使用するサーバーにインストールした後に、OS パッチを、サーバー上の Oracle Solaris Studio ソフトウェアにアクセスする各クライアントシステムにインストールすることもできます。

---

ヒント-ネットワークからのインストールには相当な時間がかかるため、可能であれば、ソフトウェアをインストールする予定の各システムにインストールバンドルのコピーを作成し、インストーラをローカルで実行してください。

---

## ゾーンへのインストール

ソフトウェアを Solaris 10 システムのゾーンにインストールするには、そのゾーンでインストーラを実行します。大域ゾーンでインストールを行い、ソフトウェアをそのゾーンのみで使用できるようにするには、GUI インストーラの「現在のゾーンのみでインストールする」チェックボックスのチェックマークを付けるか、非 GUI インストーラの起動時に `--current-zone-only` オプションを指定します。

## 異なるアーキテクチャーのクライアントで使用するための **Solaris** サーバーへのインストール

異なるアーキテクチャーのクライアントシステムで使用するために、Solaris OS を実行しているサーバー上に Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールできます。x86 ベースのクライアントシステムで使用するために SPARC ベースのサーバーにソフトウェアをインストールできます。あるいは、SPARC ベースのクライアントシステムで使用するために x86 ベースのサーバーにソフトウェアをインストールすることもできます。SPARC ベースシステム用のソフトウェアを x86 ベースシステムにインストールするには、またはその逆を行うには、インストーラの起動時に `--ignore-architecture` オプションを指定します。

## 代替ルートディレクトリへのインストール

代替ルートディレクトリを使用してソフトウェアをインストールするには、非 GUI インストーラを `--use-alternative-root directory` オプションで使します。

## 複数システムへのインストール

ソフトウェアを複数システムにインストールするには、GUI インストーラを起動するときに `--recordstate_file.xml` オプションを使用してインストールを記録できます。これにより、非 GUI インストーラで `--state state_file.xml` オプションを指定して、インストールを繰り返すことができます。

## デスクトップシステムへの **IDE** のインストール

Oracle Solaris Studio ソフトウェアをサーバーにインストールするときにインストーラに指示して、ほぼ任意のオペレーティングシステムを使用しているデスクトップシステムにインストールできるように構成された IDE (コードアナライザをインストールする場合はそれも) の配布を含む zip ファイルを生成できます。Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールしたあとで、この配布ファイルをデスクトップシステムに解凍できます。デスクトップシステムで IDE を実行すると、それは配布を生成したサーバーをリモートホストとして認識し、Oracle Solaris Studio インストール内のツールコレクション (コンパイラ、make ツール、およびデバッガ) にアクセスします。

# グラフィカルユーザーインタフェースのインストーラを使用した **Oracle Solaris Studio** のインストール

グラフィカルユーザーインタフェース (Graphical User Interface、GUI) のインストーラを使用すれば、インストールディレクトリと、インストールする Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをコンポーネント単位で選択できます。GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、[39 ページの「GUI インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。

GUI インストーラを使用するには、Java 2 ソフトウェア開発キット (JDK) 5 Update 3 が必要です。

## ▼ GUI インストーラによるインストール

- 1 現在スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./solarisstudio.sh
```

- 3 「システム分析」ページに次の情報が示されます。
  - システムに必要な OS パッチがない場合。(インストーラの起動時に `--nfs-server` オプションを指定した場合、インストーラはシステムのパッチを確認しません。) これらのパッチをインストールする必要がある場合は、次の方法でインストールできます。
    - 「詳細情報」をクリックしてから、「install\_patches.sh を今すぐ実行」をクリックします。

---

注 - Oracle Solaris 10/09 または Oracle Solaris 9/10 を実行しているシステムでインストーラを実行している場合は、`install_patches.sh` ユーティリティの実行中に次のメッセージのいずれかが表示されることがあります。

For patch 147463-01, required patch 137137-09 does not exist.

For patch 147464-01, required patch 137138-09 does not exist

パッチ 147436-01 (SPARC プラットフォーム) またはパッチ 147437-01 (x86 プラットフォーム) は Oracle Solaris 8/11 を実行しているシステムにのみ必要なので、このメッセージは無視してかまいません。

---

- Oracle Solaris Studio のインストール後に、`install_patches.sh` ユーティリティをコマンド行から実行します。

`install_patches.sh` ユーティリティを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、43 ページの「`install_patches.sh` ユーティリティのコマンド行オプション」を参照してください。

サーバー上の Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアを使用する Oracle Solaris または Linux クライアントシステムにも、必要な OS パッチを `install_patches.sh` ユーティリティでインストールする必要があります。詳細については、25 ページの「必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール」を参照してください。

- IDE、dbxtool、DLight、およびコードアナライザの実行に必要な JDK 6, Update 24 がシステムに存在しない場合。これらのツールを使用する予定がある場合は、<http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index.html> から必要な JDK をダウンロードできます。

#### 4 「Oracle Solaris Studio インストーラ」ページでは、インストールする Oracle Solaris Studio ソフトウェアのコンポーネントを選択できます。

- a. ソフトウェアのすべてのコンポーネントをインストールするには、「次へ」をクリックします。
- b. インストールするソフトウェアコンポーネントを選択する場合は、「ユーザー定義」をクリックします。「インストールをカスタマイズ」ダイアログボックスには、コンポーネントの一覧が表示され、インストール済みのコンポーネントはインストール済みであることが示されます。インストールしないコンポーネントについては、そのチェックボックスのチェックマークを外します。「OK」をクリックし、「次へ」をクリックします。

---

注- 実行時ライブラリのみをインストールするには、インストーラの起動時に `--libraries-only` オプションを指定しておく必要があります (22 ページの「GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのみインストール」を参照)。

---

- 5 「Oracle Solaris Studio のインストール」 ページで、次の操作を実行します。
  - a. ソフトウェアをデフォルトのインストールディレクトリ `/opt` にインストールしない場合は、別のインストールディレクトリを指定します。すでにインストールされている Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアコンポーネントがある場合、インストーラは同じディレクトリに追加のコンポーネントのみをインストールします。
  - b. デフォルトでは、インストーラは、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアおよびマニュアルページへのシンボリックリンクを `/usr/bin` ディレクトリと `/usr/share/man` ディレクトリに作成します。以前の Sun Studio リリースへのシンボリックリンクが `/usr/bin` と `/usr/share/man` にすでに存在する場合は、Oracle Solaris Studio 12.3 へのリンクで置き換えられます。シンボリックリンクを作成しない場合や、以前のリリースへのリンクを置き換えない場合は、「`/usr/bin` にシンボリックリンクを作成」チェックボックスのチェックマークを外します (インストール済みの Oracle Solaris Studio 12.3 へのリンクがすでに存在する場合、またはインストーラの起動時に `--nfs-server` を指定した場合は、チェックボックスは表示されず、リンクはインストールされません。)
  - c. ゾーンがあるシステムでインストーラを実行している場合は、「Oracle Solaris Studio ソフトウェアを現在のゾーンのみインストールする」チェックボックスが表示されます。デフォルトでは、インストーラはソフトウェアを現在のゾーンのみインストールします。ソフトウェアをすべてのゾーンにインストールする場合は、このチェックボックスのチェックマークを外します。大域ゾーンでインストーラを実行する場合、現在のゾーンのみでインストールを実行すると、インストールされた製品は大域ゾーンのみに表示されます。
  - d. IDE コンポーネントをインストールする場合に、デスクトップオペレーティングシステム用に構成された IDE (コードアナライザをインストールする場合はそれもの配布を含む zip ファイルをインストーラで生成するには、「インストール時にデスクトップ配布を生成」チェックボックスを選択してチェックマークを追加します。生成された zip ファイルは、Oracle Solaris Studio インストールの `lib` ディレクトリに置かれます。
  - e. 「次へ」をクリックします。
- 6 「サマリー」 ページで、インストールするコンポーネントの一覧が正しいこと、およびシステムにインストールのための十分な空き容量があることを確認します。次に、「インストール」をクリックしてインストールを起動します。

- 7 インストールが完了すると、「セットアップ完了」ページが表示されます。デフォルトでは、「インストール終了後に **Oracle Solaris Studio** ソフトウェアを登録します」チェックボックスにチェックマークが付いています。この時点で **Oracle Solaris Studio** インストールを登録しない場合は、チェックボックスをクリックしてチェックマークを外します。「完了」をクリックしてインストーラを終了します。
- 8 インストールを登録することを選択した場合は、インストーラで **Web** ブラウザが開かれ、**Oracle Solaris Studio** のコピーを登録できるページが表示されます。登録は必須ではありませんが、使用している製品を整理でき、**Oracle** からタイムリーな情報を受け取ることができます。
- 9 **Oracle Solaris Studio 12.3** を **Solaris** または **Linux** クライアントシステムから使用する場合は、サーバーにある **Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェアとマニュアルページにアクセスするための **PATH** と **MANPATH** を各クライアントシステムに設定します ([26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」](#)を参照)。
- 10 **Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェアをシングルユーザーシステムにインストールした場合は、次のように入力して、**Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェアのツールおよびマニュアルページへのアクセス設定が必要かどうかを確認します。

```
/usr/bin/version
```

- a. `/usr/bin/version: not found` というメッセージが表示されるか、以前のバージョンの **Studio** ソフトウェアが報告された場合は、[26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」](#) の、**Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェア用の **PATH** および **MANPATH** の設定の説明を参照してください。
- b. **Oracle Solaris Studio 12.3** ソフトウェアが報告された場合、**PATH** と **MANPATH** を設定する必要はありません。

## GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのみ のインストール

GUI インストーラを使用して、**Oracle Solaris Studio** 実行時ライブラリのみをインストールすることができます。

---

注-インストーラを実行してライブラリのみをインストールする場合、最初にアンインストールを実行してライブラリをアンインストールしないと、後でインストーラを実行して追加のコンポーネントをインストールすることはできません。

---

## ▼ GUI インストーラによるインストール

- 1 現在スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。  

```
./solarisstudio.sh --libraries-only
```
- 3 「Oracle Solaris Studio インストーラ」ページで、「次へ」をクリックします。
- 4 ライブラリをデフォルトのインストールディレクトリ `/opt` にインストールしない場合は、「Oracle Solaris Studio のインストール」ページで異なるインストールディレクトリを指定します。
- 5 「サマリー」ページで、システムにインストールのための十分な空き容量があることを確認します。次に、「インストール」をクリックしてインストールを起動します。
- 6 インストールが完了すると、「セットアップ完了」ページが表示されます。「完了」をクリックしてインストーラを終了します。

## 非 GUI インストーラを使用した Oracle Solaris Studio のインストール

デフォルトでは、非 GUI インストーラは、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのすべてのコンポーネントをデフォルトのインストールディレクトリに暗黙のうちにインストールします。インストーラの起動時に `--install-components` オプションを指定すると、どのコンポーネントをインストールするかを選択できます。このオプションに指定できるコンポーネント名のリストについては、`--print-components-description` オプションを使用するか、[40 ページの「非 GUI インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。

インストーラを `--installation-locationdirectory` オプションで起動すると、選択したディレクトリにコンポーネントをインストールできます。インストーラを `--libraries-only` オプションを使用して起動すると、実行時ライブラリのみをインストールできます ([25 ページの「非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリのみインストール」](#)を参照)。非 GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションの一覧については、[40 ページの「非 GUI インストーラのコマンド行オプション」](#)を参照してください。

## ▼ 非 GUI インストーラによるインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./solarisstudio.sh --non-interactive
```

Oracle Solaris Studio ソフトウェアの選択したコンポーネントだけをインストールするには、`--install-components` オプションとインストールするコンポーネントの名前を含めます。

IDE コンポーネントをインストールする場合に、デスクトップオペレーティングシステム用に構成された IDE (コードアナライザをインストールする場合はそれも) の配布を含む zip ファイルをインストーラで生成するには、`--generate-desktop-dir` オプションを含めます。生成された zip ファイルは、Oracle Solaris Studio インストールの `lib` ディレクトリに置かれます。

- 3 インストーラはメッセージを表示せずに動作し、インストールが完了するとプロンプトを返します。インストーラはログファイルをディレクトリ `/root/.nbi/logs` に書き込みます。
- 4 Oracle Solaris Studio 12.3 を Solaris または Linux クライアントシステムから使用する場合は、サーバーにある Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアとマニュアルページにアクセスするための `PATH` と `MANPATH` を各クライアントシステムに設定します (26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」を参照)。
- 5 Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをシングルユーザーシステムにインストールした場合は、次のように入力して、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのツールおよびマニュアルページへのアクセス設定が必要かどうかを確認します。

```
/usr/bin/version
```

- a. `/usr/bin/version: not found` というメッセージが表示されるか、以前のバージョンの Sun Studio ソフトウェアが報告された場合は、26 ページの「開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定」の、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェア用の `PATH` および `MANPATH` の設定の説明を参照してください。
- b. Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアが報告された場合、`PATH` と `MANPATH` を設定する必要はありません。

## 非 GUI インストーラを使用した実行時ライブラリ のみのインストール

非 GUI インストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 実行時ライブラリのみをインストールすることができます。

---

注- インストーラを実行してライブラリのみをインストールする場合、最初にアンインストールを実行してライブラリをアンインストールしないと、後でインストーラを実行して Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールすることはできません。

---

### ▼ 非 GUI インストーラによるインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストーラがあるディレクトリで、次のように入力してインストーラを起動します。

```
./solarisstudio.sh --non-interactive --libraries-only
```

- 3 インストーラはメッセージを表示せずに動作し、インストールが完了するとプロンプトを返します。インストーラはログファイルをディレクトリ `/root/.nbi/logs` に書き込みます。

## 必要な Oracle Solaris OS パッチのインストール

Solaris OS で Oracle Solaris Studio 12.3 リリースのコンパイラとツールが正しく動作するためには、いくつかのオペレーティングシステムパッチが必要になります (付録 D 「パッチの識別番号と説明」を参照)。必要な Solaris OS パッチをインストールするには、製品ダウンロードに含まれる `install_patches.sh` ユーティリティを実行できます。

GUI インストーラを実行している場合、システムに必要な OS パッチが存在していないときは、「システム分析」ページに示されます (インストーラの起動時に `--nfs-server` オプションを指定した場合を除く)。「詳細情報」をクリックしてから「`install_patches.sh` を今すぐ実行」をクリックすると、`install_patches.sh` ユーティリティを実行することができます。

非 GUI インストーラを実行する場合、インストール後に `install_patches.sh` ユーティリティを実行し、必要な OS パッチがシステムに存在することを確認します。

注 - Oracle Solaris 10/09 または Oracle Solaris 9/10 を実行しているシステムで `install_patches.sh` ユーティリティを実行している場合は、次のメッセージのいずれかが表示されることがあります。

```
For patch 147463-01, required patch 137137-09 does not exist.
```

```
For patch 147464-01, required patch 137138-09 does not exist
```

パッチ 147436-01 (SPARC プラットフォーム) またはパッチ 147437-01 (x86 プラットフォーム) は Oracle Solaris 8/11 を実行しているシステムにのみ必要なため、このメッセージは無視してかまいません。

---

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアを Solaris または Linux サーバーにインストールし、そのソフトウェアをクライアントから使用する場合は、次の処理を行います。

1. 各クライアントシステムで、パッケージインストーラをダウンロードしたサーバー上のディレクトリをマウントします。

```
mount server:filesystem download_directory
```

2. 各クライアントシステムで、`install_patches.sh` ユーティリティを実行し、必要な Solaris OS パッチをインストールします。

## 開発ツールとマニュアルページ用の環境変数の設定

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェア製品のコンポーネントとマニュアルページはシステムディレクトリ `/usr/bin/` と `/usr/share/man` にインストールされません。したがって、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアが使用できるように、`PATH` と `MANPATH` 環境変数の変更が必要になる場合があります。

次の場合、パスを変更する必要はありません。

- 以前に、Sun Studio 11 ソフトウェア、Sun Studio 12 ソフトウェア、Sun Studio 12 Update 1 ソフトウェア、または Oracle Solaris Studio 12.2 ソフトウェアをシステムにインストールしていない。
- `/usr/bin/version` コマンドで Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアが報告された。

Solaris プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/solarisstudio12.3/bin` を `PATH` 環境変数に追加します。Linux プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/oracle/solarisstudio12.3/bin` を `PATH` 環境変数に追加します。以前のバージョンの Sun Studio、Sun ONE Studio、または Forte Developer ソフトウェアをインストールしている場合は、以前のバージョンのインストールのパスの前にパスを追加します。

Solaris プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/solarisstudio12.3/man/` を `MANPATH` 環境変数に追加します。Linux プラットフォームの場合は、パス `/installation_directory/oracle/solarisstudio12.3/man/` を `MANPATH` 環境変数に追加します。

## Oracle Solaris Studio 12.3 IDE の起動

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアと必要な OS パッチをインストールして、パスにそのソフトウェアインストールディレクトリを追加すると、ソフトウェアを起動できます。IDE を起動するには、次のように入力します。

```
solstudio &
```

---

注 - このコマンドのフルパスは、Solaris システムの場合は `/installation_directory/solarisstudio12.3/bin/solstudio` に、Linux プラットフォームの場合は `/installation_directory/oracle/solarisstudio12.3/bin/solstudio` になります。

---



# Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのアンインストール

---

この章には、次の情報が含まれます。

- 29 ページの「以前のリリースの Oracle Solaris Studio または Sun Studio ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール」
- 29 ページの「アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択」
- 30 ページの「ソフトウェアのアンインストール」

## 以前のリリースの **Oracle Solaris Studio** または **Sun Studio** ソフトウェアがインストールされている場合のアンインストール

以前の Oracle Solaris Studio または Sun Studio ソフトウェアがインストールされているシステムに Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをインストールすると、アンインストーラの実行時に Oracle Solaris Studio 12.3 のみが削除されます。アンインストーラでは、インストール済みのすべての製品コンポーネントが削除されます。

## アンインストーラのローカル表示とリモート表示の選択

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのアンインストール時には、アンインストーラをローカル表示またはリモート表示できます。

### ▼ リモート表示によるアンインストールの準備

- 1 ディスプレイコンピュータで、コマンド行に次のように入力し、クライアントから X サーバーにアクセスできるようにします。

`xhost + source-computer-name`

*source-computer-name* には、ソースコンピュータ (製品 CD-ROM またはダウンロードしたファイルを含むコンピュータ) で `/usr/bin/hostname` コマンドを実行したときに出力される名前を入力します。

- 2 ソースコンピュータにログインし、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
rlogin source-computer-name -l rootname
Password: root-password
```

- 3 ソースコンピュータで、ディスプレイコンピュータに接続されたモニターを表示先に設定します。

C シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
setenv DISPLAY display-computer-name:n.n
```

Bourne シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
DISPLAY=display-computer-name:n.n
export DISPLAY
```

Korn シェルを使用する場合は、次のように入力します。

```
export DISPLAY=display-computer-name:n.n
```

*display-computer-name* には、ディスプレイコンピュータで `/usr/bin/hostname` を実行したときに表示される名前を入力します。

## ソフトウェアのアンインストール

グラフィカルユーザーインタフェースまたは非 GUI のアンインストーラを使用して、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのインストール済みのすべてのコンポーネントをアンインストールできます。

### ▼ GUI アンインストーラによるアンインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su
Password: root-password
```

- 2 インストールディレクトリ (例: `/opt/solarisstudio12.3`) に移動します。

- 3 次のように入力して、GUI アンインストーラを起動します。

```
./uninstall.sh &
```

- 4 「サマリー」 ページで「アンインストール」をクリックして、アンインストールを開始します。

- 5 アンインストールが完了すると、「セットアップ完了」ページが表示されます。「完了」をクリックしてアンインストーラを終了します。

## ▼ 非GUIアンインストーラによるアンインストール

- 1 スーパーユーザー (**root**) になっていない場合は、次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 インストールディレクトリ (例: **/opt/solarisstudio12.3**) に移動します。

- 3 次のように入力して、非GUIアンインストーラを起動します。

```
./uninstall.sh --non-interactive
```

- 4 アンインストーラはメッセージを表示せずに動作し、アンインストールが完了するとプロンプトを返します。



## トラブルシューティング

---

この章では、Oracle Solaris Studio 12.3 のインストール時やアンインストール時に発生する可能性がある問題に対処する方法について説明します。

この章には、次の情報が含まれます。

- 33 ページの「TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する」
- 34 ページの「GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場がある」
- 34 ページの「インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合がある」
- 34 ページの「失敗したインストールまたはアンインストールの対処」
- 36 ページの「NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する」
- 37 ページの「インストールログファイルの表示」

### TMPDIR が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラが失敗する

Oracle Solaris Studio ソフトウェアへのシンボリックリンクを `/usr/bin` と `/usr/man/share` ディレクトリにインストールするように選択しており、TMPDIR 環境変数が、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合、GUI インストーラはインストールを完了できません。この状態の発生を回避するには、TMPDIR 環境変数を設定解除するか、すべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリに設定してからインストーラを起動します。

## GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場合があります

一部のシステムでは、GUI インストーラを起動するときに GNOME エラーが発生する場合があります。このエラーにより GUI インストーラを起動できない場合は、非 GUI インストーラを使用してください。

## インストーラのロックファイルが原因でインストーラを起動できない場合があります

インストーラがインストールを完了することなく中断または終了した場合、ロックファイルが原因でインストーラを再起動できない場合があります。インストーラを起動するときに、インストーラのインスタンスはすでに実行されているというメッセージが表示される場合、`/root/.nbi` ディレクトリからのロックファイルの削除が必要になる場合があります。

## 失敗したインストールまたはアンインストールの対処

Solaris プラットフォームでは、インストーラは、インストールした Oracle Solaris Studio 12.3 パッケージに関する情報を次の 2 つの場所に格納します。

- `productregistry` ファイル、Solaris Product Registry データベース
- `/root/.nbi` ディレクトリ

Linux プラットフォームでは、インストーラは、インストールした Oracle Solaris Studio 12.3 パッケージに関する情報を次の 2 つの場所に格納します。

- インストール済みパッケージのデータベース
- `/root/.nbi` ディレクトリ

一部のパッケージが適切にインストールされていない場合、Oracle Solaris Studio ソフトウェアの使用時に問題が発生します。また、追加のコンポーネントのインストール時や、ソフトウェアのアンインストール時に問題が発生する場合があります。

たとえば、インストールが完了する前にインストーラが終了した場合、アンインストーラ (`uninstall.sh`) がインストールディレクトリに表示されない場合があります。または、`pkgadd` コマンドを使用して任意のパッケージをインストールした場合、`/root/.nbi` ディレクトリ内の `productregistry` ファイルまたは `product-cache` ディレクトリが破壊される場合があります。この場合、アンインストーラではパッケージをアンインストールできません。パッケージを正しい方法で削除して、インストーラを再起動できるようにする必要があります。

すべての製品ファイルが削除される前にアンインストーラが終了した場合、アンインストーラを再度実行しても残りのファイルは削除されません。残りのファイルを正しい方法で削除して、製品のアンインストールを完了する必要があります。

製品をアンインストールするために、インストールディレクトリを削除しないでください。パッケージは製品レジストリデータベースと `/root/.nbi` ディレクトリに依然として登録されているため、インストーラを実行できません。

## アンインストーラを使用して失敗したアンインストールの対処

Oracle Solaris Studio のパッケージがおそらく正しくインストールされており、インストールディレクトリ内にアンインストーラが存在していても、`/root/.nbi` が破壊されているためにアンインストーラが失敗する場合があります。この場合に、Oracle Solaris Studio のパッケージとインストールディレクトリをアンインストーラに強制的に削除させるには、アンインストーラの起動時に `--force-uninstall` を指定します。

このオプションを使用してアンインストーラを実行した場合は、`/root/.nbi` ディレクトリからパッケージエントリが削除されず、それによって次の影響があります。

- アンインストールした Oracle Solaris Studio リリースを再インストールするためにインストーラを実行した場合、インストールするコンポーネントを指定することはできず、以前インストールされていたすべてのパッケージがインストールされます。
- 任意の Oracle Solaris Studio リリースのインストーラを実行すると、`/root/.nbi` ディレクトリが壊れていることが警告され、インストールを続行するか取り消すかを選択できます。

## ▼ Solaris プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処

- 1 次のように入力してスーパーユーザーになります。

```
su  
Password: root-password
```

- 2 次のように入力し、**Solaris Product Registry** ツールを起動します。

```
/usr/bin/prodreg &
```

- 3 ツールの左区画で、「未分類のソフトウェア」ノードを展開します。

- 4 **Oracle Solaris Studio 12.3** が含まれているすべてのパッケージ名を選択して、「アンインストール」をクリックします。手順に従ってパッケージを削除します。

- 5 「終了」をクリックしてツールを終了します。
- 6 次のように入力して、`/root/.nbi` ディレクトリを削除します。  

```
rm -r /.nbi
```

## ▼ Linux プラットフォームで失敗したインストールまたはアンインストールの対処

- 1 次のように入力してスーパーユーザーになります。  

```
su  
Password: root-password
```
- 2 次のように入力して、すべての **Oracle Solaris Studio** パッケージを確認します。  

```
rpm -q -a | grep solarisstudio12.3
```
- 3 次のように入力して、各 **Oracle Solaris Studio 12.3** の rpm パッケージを削除します。  

```
rpm -e package-name
```

Oracle Solaris Studio 12.3 rpm パッケージには、たとえば `solarisstudio12.3-cc-12.3-1` のように、サフィックス 12.3 が付加されます。Sun Studio リリースからパッケージを削除しないでください。Sun Studio リリースには異なるサフィックスが付いています。
- 4 次のように入力して、`/root/.nbi` ディレクトリを削除します。  

```
rm -r /.nbi
```

## NFS マウント済みファイルシステムでは、書き込み権限が設定されていない場合、インストールが失敗する

NFS マウント済みファイルシステムでインストールが失敗した場合、そのファイルシステムに対する書き込み権限を保有していることを確認してください。書き込み権は、次の手順を実行すると確認できます。NFS マウント済みファイルシステムでのインストール方法については、15 ページの「NFS マウントのファイルシステムへのインストール」を参照してください。

1. 次のように入力して、書き込み権があるかどうかを確認します。

```
touch /net/remote-system/opt/testfile
```

エラーメッセージが表示された場合、書き込み権はありません。例:

```
touch /net/harker/opt/testfile  
touch: /net/harker/opt/testfile cannot create
```

2. 書き込み権を持つ別のインストールディレクトリを選択するか、またはファイルシステムのアクセス権を変更するようにシステム管理者に依頼してください。

## インストールログファイルの表示

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアをインストールすると、インストールセッションの記録を含むログファイルが自動的に生成されます。ログファイルは `/root/.nbi/logs` に書き込まれます。



# インストーラ、アンインストーラ、install\_patches ユーティリティのコマンド行オプション

---

## GUI インストーラのコマンド行オプション

GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションは次のとおりです。

<code>--current-zone-only</code>	現在のゾーンのみインストールします。インストーラを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、インストールする製品はそのゾーンでのみ使用可能になります。
<code>--help</code>	オプションに関する情報を表示します。
<code>--ignore-arch</code>	システムアーキテクチャーの確認を無効にします (Oracle Solaris システムのみ)
<code>--javahome <i>directory</i></code>	インストーラを実行するときに <i>directory</i> 内の JDK を使用します。インストーラがシステムの標準の場所で JDK を見つけられない場合に、このオプションを使用して JDK の場所を示す必要があります。
<code>--libraries-only</code>	実行時ライブラリのみをインストールします。
<code>--locale <i>locale</i></code>	指定した <i>locale</i> を使用して、インストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。
<code>--nfs-server</code>	NFS サーバーインストールモードを使用します。インストーラはサーバーに必要な Solaris OS パッチが存在しているかどうかを確認せず、 <code>/usr/bin</code> ディレクトリにシンボリックリンクを作成しません。

<code>--output <i>output_file</i></code>	インストーラのすべての出力を、指定したファイルに書き込みます。
<code>--record <i>state_file.xml</i></code>	GUI インストーラのインストーラセッションを記録します。この記録を使用すれば、別のシステムで非 GUI インストーラを使用してインストールを繰り返すことができます。このオプションは、製品コンポーネントのサブセットを複数システムにインストールする場合に特に役立ちます。
<code>--tempdir <i>directory</i></code>	デフォルトで、インストーラは一時データを <code>/tmp</code> ディレクトリに抽出します。十分な空き容量がシステムの <code>/tmp</code> ディレクトリにない場合、インストーラ用の別のディレクトリを指定できます。
<code>--verbose</code>	詳細な出力をコンソールに書き込みます。

## 非 GUI インストーラのコマンド行オプション

非 GUI インストーラを起動するときの有効なコマンド行オプションは次の通りです。

<code>--create-symlinks</code>	Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアとマニュアルページへのシンボリックリンクを <code>/usr/bin</code> ディレクトリと <code>/usr/share/man</code> ディレクトリに作成します。
<code>--current-zone-only</code>	現在のゾーンのみインストールします。インストーラを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、インストールする製品はそのゾーンでのみ表示されます。
<code>--extract-installation-data <i>directory</i></code>	インストールデータを抽出し、インストールを実行しません。
<code>--generate-desktop-distr</code>	デスクトップオペレーティングシステム用に構成された IDE (コードアナライザをインストールする場合はそれも) の配布を含む zip ファイルを生成します。
<code>--help</code>	オプションに関する情報を表示します。
<code>--ignore-arch</code>	システムアーキテクチャーの確認を無効にしません (Oracle Solaris システムのみ)

<code>--install-components</code> <i>component_name</i> , <i>component_name</i> ,...	指定されたコンポーネントだけをインストールします。有効な <i>component_name</i> は、 <code>c-and-cpp-compilers</code> 、 <code>code-analyzer-tool</code> 、 <code>dbx-debugger</code> 、 <code>dbxtool</code> 、 <code>dlight-observability-tool</code> 、 <code>dmake</code> 、 <code>fortran-compiler</code> 、および <code>studio-ide</code> です。
<code>--installation-location</code> <i>directory</i>	Oracle Solaris Studio ソフトウェアを、デフォルトのインストールディレクトリ <code>/opt</code> ではなく、指定したディレクトリにインストールします。
<code>--javahome</code> <i>directory</i>	インストーラを実行するときに <i>directory</i> 内の JDK を使用します。インストーラがシステムの標準の場所で JDK を見つけられない場合に、このオプションを使用して JDK の場所を示す必要があります。
<code>--libraries-only</code>	実行時ライブラリのみをインストールします。
<code>--locale</code> <i>locale</i>	指定した <i>locale</i> を使用して、インストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、 <code>en</code> (英語)、 <code>ja</code> (日本語)、 <code>zh</code> (簡体字中国語) です。
<code>--nfs-server</code>	NFS サーバーインストールモードを使用します。インストーラはサーバーに必要な Solaris OS パッチが存在しているかどうかを確認せず、 <code>/usr/bin</code> ディレクトリにシンボリックリンクを作成しません。
<code>--non-interactive</code>	非 GUI モードでインストーラを起動します。
<code>--print-components-description</code>	<code>--install-components</code> オプションに使用できるコンポーネント名を一覧表示します
<code>--silent-logs-dir</code> <i>directory</i>	インストーラのログファイルを、指定したディレクトリに書き込みます。
<code>--state</code> <i>state_file</i> .xml	GUI インストーラによって記録された状態ファイルを再生して、インストールセッションをメッセージを表示せずに繰り返します。このオプションを使用すれば、非 GUI モードで製品コンポーネントのサブセットをインストールできます。
<code>--tempdir</code> <i>directory</i>	デフォルトで、インストーラは一時データを <code>/tmp</code> ディレクトリに抽出します。十分な空き容量がシステムの <code>/tmp</code> ディレクトリにない場合、インストーラ用の別のディレクトリを指定できます。

- |   |  |
|---|--|
| <code>--use-alternative-root directory</code> | デフォルトのルートディレクトリ / ではなく、指定したルートディレクトリにインストールします。代替ルートとして使用するディレクトリのフルパスを指定します。このオプションは、Solaris OS を実行するシステムでのみ有効です。 |
| <code>--verbose</code>                        | 詳細な出力をコンソールに書き込みます。  |

## アンインストーラのコマンド行オプション

アンインストーラを起動するときの有効なオプションは次のとおりです。

- |   |   |
|---|---|
| <code>--force-uninstall</code>                | <code>/root/.nbi</code> ディレクトリを削除せずに、Oracle Solaris Studio 12.3 パッケージとインストールディレクトリを削除します。   |
| <code>--javahome directory</code>             | アンインストーラを実行するときに <code>directory</code> 内の JDK を使用します。このオプションは、アンインストーラがシステムの標準の場所で JDK を見つけられないときに、それを指定するために必要になります。  |
| <code>--locale locale</code>                  | 指定した <code>locale</code> を使用して、アンインストーラのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、 <code>en</code> (英語)、 <code>ja</code> (日本語)、 <code>zh</code> (簡体字中国語) です。このオプションは GUI アンインストーラでのみ有効です。 |
| <code>--non-interactive</code>                | アンインストーラを非 GUI モードで実行し、インストール済みのソフトウェアコンポーネントをアンインストールします。  |
| <code>--output output_file</code>             | アンインストーラのすべての出力を、指定したファイルに書き込みます。このオプションは GUI アンインストーラでのみ有効です。  |
| <code>--tempdir directory</code>              | デフォルトで、アンインストーラは一時データを <code>/tmp</code> ディレクトリに抽出します。十分な空き容量がシステムの <code>/tmp</code> ディレクトリにない場合、アンインストーラが使用する別のディレクトリを指定できます。   |
| <code>--use-alternative-root directory</code> | デフォルトのルートディレクトリ / ではなく、指定したルートディレクトリからアンインストールします。このオプションは、非 GUI アンインストーラにのみ、かつ Solaris OS を実行するシステムでのみ有効です。  |

--verbose

詳細な出力をコンソールに書き込みます。

## install\_patches.sh ユーティリティのコンマンド行オプション

install\_patches.sh ユーティリティを起動するときの有効なオプションは次のとおりです。

-G

パッチを現在のゾーンのパッケージにのみ追加します。ユーティリティを大域ゾーンで実行する場合、このオプションを使用すると、パッチはそのゾーンでのみ使用可能になります。

-p

Oracle Solaris Studio 製品のパッチをインストールします (ある場合)。このオプションを指定し、使用可能なパッチがない場合、そのことを示すメッセージが表示されます。

-l *locale*

指定した *locale* を使用して、ユーティリティのデフォルトロケールをオーバーライドします。有効なロケールは、en (英語)、ja (日本語)、zh (簡体字中国語) です。

-R *directory*

パッチを、デフォルトのルートディレクトリ / ではなく、指定したルートディレクトリにインストールします。代替ルートとして使用するディレクトリのフルパスを指定します。

-h

オプションに関する情報を表示します。



## スワップ領域の追加

---

### スワップ領域の追加

ソフトウェアのインストール先のシステムに、最低限必要な1Gバイトのスワップ領域がない場合は、次の手順でスワップ領域を追加してください。

#### ▼ Solaris システムでのスワップ領域の追加

- 1 次のように入力し、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
% su  
Password: root-password
```

- 2 スワップ領域を追加するために、次のコマンドで特定のディレクトリにファイルを作成します。

```
mkfile number[m|k|b] /directory/swap-file-name
```

ここで、*number* にはスワップ領域の容量を指定し、これに続けて容量の単位 (M バイトの場合は *m*、K バイトの場合は *k*、ブロックの場合は *b*) を入力します。*directory* には、スワップ領域の追加権限が与えられているディレクトリを指定します。*swap-file-name* には、作成するスワップファイルの名前を指定します。

たとえば、*foo* ディレクトリに *16mswap* という名前の 16M バイトのスワップファイルを作成するには、次のようにします。

```
mkfile 16m /foo/16mswap
```

詳細は、`mkfile(1M)` のマニュアルページを参照してください。

- 3 次のように入力し、ファイルが作成されたかどうか確認します。

```
ls -l /directory/swap-file-name
```

新しいファイルがディレクトリに表示されます。例:

```
ls -l /foo/16mswap
-rw-----T  1 root    other    16777216 Dec 12 14:24 /foo/16mswap
```

- 4 追加のスワップ領域を指定する場合は、次のように **swap** コマンドを入力して実行します。

```
swap -a /directory/swap-file-name
```

- 5 次のように入力し、スワップ領域が追加されたかどうか確認します。

```
swap -s
```

出力には、割り当てられたスワップ領域が表示されます。例:

```
swap -s
total: 289336k bytes allocated + 27008k reserved = 316344k used, 298336k available
```

## ▼ Linux システムでのスワップ領域の追加

- 1 次のように入力し、スーパーユーザー (**root**) になります。

```
% su
Password: root-password
```

- 2 スワップ領域を追加するために、次のコマンドで特定のディレクトリにファイルを作成します。

```
dd if=/dev/zero of=/dir/myswapfile bs=1024 count=number_blocks_needed
```

*dir* には、スワップ領域の追加権限が与えられているディレクトリを指定します。*myswapfile* には、作成するスワップファイルの名前を指定します。*number\_blocks\_needed* には、作成するファイルの容量を 1024 バイトの大きさのブロック数で指定します。詳細は、[dd\(1\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 3 次のように入力し、ファイルが作成されたかどうか確認します。

```
ls -l /dir/myswapfile
```

新しいファイルがディレクトリに表示されます。

- 4 次のように入力し、新しいスワップ領域を初期化します。

```
mkswap /dir/myswapfile
```

詳細は、[mkswap\(8\)](#) のマニュアルページを参照してください。

- 5 次のように入力して **swapon** コマンドを実行し、ページングおよびスワッピング用に新しいスワップ領域を使用できるようにします。

```
swapon -a /dir/myswapfile
```

- 6 次のように入力し、スワップ領域が追加されたかどうか確認します。

```
swapon -s
```

出力には、割り当てられたスワップ領域が表示されます。



# Oracle Solaris 12.3 のコンポーネントとパッケージ

---

この付録では、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアを構成するコンポーネント、およびパッケージの一覧を示します。

表 C-1 には、SPARC システム版 Solaris OS 用の Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのパッケージ構成とコンポーネント情報を示します。

表 C-2 には、x86 システム版 Solaris OS 用の Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのパッケージ構成とコンポーネント情報を示します。

表 C-3 には、Linux プラットフォーム用 Oracle Solaris Studio 12.3 の RPM パッケージとコンポーネント情報を示します。

表 C-1 SPARC システム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよびパッケージ

コンポーネント	パッケージ
C および C++ コンパイラ	SPR0-12-3-cc
	SPR0-12-3-c++
	SPR0-12-3-c++-libs
コードアナライザ	SPR0-12-3-code-analyzer
Fortran コンパイラ	SPR0-12-3-fortran
	SPR0-12-3-f90-libs
dbx デバッガ	SPR0-12-3-dbx
dbxtool	SPR0-12-3-dbxtool
dmake	SPR0-12-3-dmake
IDE	SPR0-12-3-studio-ide
DLight 可観測性ツール	SPR0-12-3-dlight

表 C-1 SPARC システム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよびパッケージ (続き)

コンポーネント	パッケージ
法的ファイル	SPRO-12-3-legal
Oracle Instant Client	SPRO-12-3-oic SPRO-12-3-oic-libs
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	SPRO-12-3-analyzer
数学ライブラリ	SPRO-12-3-math-libs
サポートファイル	SPRO-12-3-backend SPRO-12-3-studio-common
Performance Library	SPRO-12-3-perflib
ローカリゼーション	SPRO-12-3-studio-ja SPRO-12-3-studio-zhCN

表 C-2 x86 システム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよびパッケージ

コンポーネント	パッケージ
C および C++ コンパイラ	SPRO-12-3-cc SPRO-12-3-c++ SPRO-12-3-c++-libs
コードアナライザ	SPRO-12-3-code-analyzer
Fortran コンパイラ	SPRO-12-3-fortran SPRO-12-3-f90-libs
dbx デバッガ	SPRO-12-3-dbx
dbxtool	SPRO-12-3-dbxtool
dmake	SPRO-12-3-dmake
IDE	SPRO-12-3-studio-ide
DLight 可観測性ツール	SPRO-12-3-dlight
法的ファイル	SPRO-12-3-legal
Oracle Instant Client	SPRO-12-3-oic SPRO-12-3-oic-libs
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	SPRO-12-3-analyzer

表 C-2 x86 システム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよびパッケージ (続き)

コンポーネント	パッケージ
数学ライブラリ	SPRO-12-3-math-libs
サポートファイル	SPRO-12-3-backend SPRO-12-3-studio-common
Performance Library	SPRO-12-3-perflib
ローカリゼーション	SPRO-12-3-studio-ja SPRO-12-3-studio-zhCN

表 C-3 Linux プラットフォーム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよび RPM パッケージ

コンポーネント	RPM
C および C++ コンパイラ	solarisstudio12.3-cc-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-c++-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-c++-libs-12.3-1.x86_64.rpm
コードアナライザ	solarisstudio12.3-code-analyzer-12.3-1.x86_64.rpm
Fortran コンパイラ	solarisstudio12.3-fortran-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-f90-libs-12.3-1.x86_64.rpm
dbx デバッガ	solarisstudio12.3-dbx-12.3-1.x86_64.rpm
dbxtool	solarisstudio12.3-dbxtool-12.3-1.x86_64.rpm
dmake	solarisstudio12.3-dmake-12.3-1.x86_64.rpm
IDE	solarisstudio12.3-studio-ide-12.3-1.x86_64.rpm
法的ファイル	solarisstudio12.3-legal-12.3-1.x86_64.rpm
Oracle Instant Client	solarisstudio12.3-oic-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-oic-libs-12.3-1.x86_64.rpm
パフォーマンスおよびスレッド解析ツール	solarisstudio12.3-analyzer-12.3-1.x86_64.rpm
サポートファイル	solarisstudio12.3-backend-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-studio-common-12.3-1.x86_64.rpm solarisstudio12.3-compiler-oslibs-12.3-1.x86_64.rpm
Performance Library	solarisstudio12.3-perflib-12.3-1.x86_64.rpm

表 C-3 Linux プラットフォーム用の Oracle Solaris Studio 12.3 のコンポーネントおよび RPM パッケージ (続き)

コンポーネント	RPM
ローカリゼーション	solarisstudio12.3-studio-ja-12.3-1.x86_64.rpm
	solarisstudio12.3-studio-zhCN-12.3-1.x86_64.rpm

## パッチの識別番号と説明

---

Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアには、Oracle Solaris 10 用のオペレーティングシステムパッチが用意されています。今回のリリースに含まれるコンパイラおよびツールを正しく動作させるには、これらのパッチが必要です。この付録では、このリリースに含まれている Solaris OS のパッチを一覧で示します。これらのパッチをシステムにインストールしていない場合は、`install_patches` スクリプトを使用してインストールできます。このスクリプトは、インストーラのあるディレクトリに含まれます。

表 D-1 には、SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-2 には、x86 システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

ソフトウェアの使用に影響する可能性があるかどうかにかかわらず、特定の問題を解決する追加のパッチ (製品ダウンロードファイルまたは製品 DVD に含まれない) をインストールすることをお勧めします。推奨されるパッチのいずれかをインストールするには、[My Oracle Support \(http://support.oracle.com\)](http://support.oracle.com) からパッチをダウンロードして、そのパッチに付属する README ファイルの手順に従います。リスクに関する重要な情報と適切な手順が記載されています。

表 D-3 には、SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-4 には、x86 システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチのパッチ識別番号と説明を示します。

表 D-1 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
118683-07	アセンブラおよび libxprof パッチ (-xprofile オプションで必要)

表 D-1 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ (続き)

パッチ識別番号	パッチの説明
120753-10	libmtsk のパッチ
119963-24	C++ 用 共用ライブラリのパッチ
147436-01	リンカーパッチ (Solaris 10 8/11 のみ)

表 D-2 x86 システム版 Solaris 10 OS 用の必須パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
119961-10	アセンブラおよび libxprof パッチ (-xprofile オプションで必要)
120754-10	libmtsk のパッチ
119964-24	C++ 用 共用ライブラリのパッチ
147437-01	リンカーパッチ (Solaris 10 8/11 のみ)

表 D-3 SPARC システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
144500-19	カーネルパッチ。Solaris 10 8/11 より前の Solaris 10 OS リリースを実行しているシステムで、Discover で計測機構が組み込まれているバイナリのデータ競合を検出するために collect コマンドを実行する場合は、あるいは、オブジェクト指向機能を使用する Fortran プログラムの共有オブジェクトのオブジェクトファイルを生成する場合は、このパッチが必要です。

表 D-4 x86 システム版 Solaris 10 OS 用の推奨パッチ

パッチ識別番号	パッチの説明
144501-19	カーネルパッチ。Solaris 10 8/11 より前の Solaris 10 リリースを実行しているシステムで、Discover で計測機構が組み込まれているバイナリのデータ競合を検出するために collect コマンドを実行する場合は、あるいは、オブジェクト指向機能を使用する Fortran プログラムの共有オブジェクトのオブジェクトファイルを生成する場合は、このパッチが必要です。

# Oracle Solaris Studio 12.3 コンポーネントのバージョン番号

---

この付録では、Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアのコンポーネントのバージョン番号を示します。

表 E-1 Oracle Solaris Studio 12.3 コンポーネントのバージョン番号

コンポーネント	バージョン番号
C コンパイラ	5.12
C++ コンパイラ	5.12
C++ 標準ライブラリ	デフォルト (libCstd)
コードアナライザ	12.3
dbx デバッガ	7.9
dbxtool	12.3
DLight	2.1
dmake	8.1
Fortran 95 コンパイラ	8.6
IDE	12.3
Locklint	2.6
OpenMP サポート	3.1
パフォーマンスアナライザ	7.9
STLport	4.5.3
Sun Performance Library	2011/10/29
スレッドアナライザ	7.9

---

表 E-1 Oracle Solaris Studio 12.3 コンポーネントのバージョン番号 (続き)

---

コンポーネント	バージョン番号
Tools.h++	7.1.0

---

# 索引

---

## I

### IDE

- デスクトップシステムへのインストール, 18
- デスクトップシステムへのインストール用の配布の生成, 21, 24

IDE, 起動, 27

## M

MANPATH 環境変数, 設定, 26

## N

NFS マウントのファイルシステム, インストール, 15

## O

Oracle Solaris Studio コンパイラとツール, アクセス, 26

## P

PATH 環境変数, 設定, 26  
productregistry ファイル, 34

## R

/root/.nbi ディレクトリ, 34

## あ

アンインストール, リモート表示の使用, 29  
アンインストール, 失敗, 対処  
    Linux プラットフォーム, 36  
    Solaris プラットフォーム, 35  
インストール, 失敗, 対処, 34

## い

インストーラのロックファイル, 34  
インストール  
    NFS マウント済みファイルシステムでの失敗, 36  
    同じアーキテクチャーのクライアントが使用するサーバー, 17  
概要, 11  
カスタマイズ, 20, 23, 24  
クライアントに必要な OS パッチ, 26  
異なるアーキテクチャーのクライアントで使用するためにサーバー上に, 18  
サーバーに必要な OS パッチ, 25  
失敗, 対処, 34  
    Linux プラットフォーム, 36  
    Solaris プラットフォーム, 35  
シンボリックリンク, 21  
ゾーン, 17

## インストール (続き)

- 代替ルートディレクトリ, 18
  - 単一ユーザーシステム, 17
  - 複数システム, 18
  - リモート表示の使用, 14
  - ローカル表示の使用, 14
- インストールの登録, 22
- インストール方法, 選択, 16
- インストールログファイル, 37

## く

- グラフィカルユーザーインターフェースのアンインストーラ, 使用, 30
- グラフィカルユーザーインターフェースのインストーラ
- TMPDIR がすべてのユーザーに書き込みを許可するディレクトリを指していない場合のエラー, 33
  - 起動時の GNOME エラー, 34
  - 使用, Oracle Solaris Studio ソフトウェアをインストールするには, 19
  - 使用, 実行時ライブラリのみをインストールするには, 23

## こ

- コードアナライザ
- デスクトップシステムへのインストール, 18
  - デスクトップシステムへのインストール用の配布の生成, 21
- コマンド行オプション
- GUI インストーラ用, 39
  - アンインストーラ用, 42
  - 非 GUI インストーラ用, 40
- コンポーネント, 説明, 49
- コンポーネントのバージョン番号, 55

## さ

- サーバー, 同じアーキテクチャーのクライアントが使用するためのインストール, 17

## し

- システム要件, 12-13
- シンボリックリンク, インストール, 21

## す

- スワップ領域, 確認, 45

## そ

- ソースコンピュータ, 14
- ゾーン, インストール, 17

## た

- 代替ルートディレクトリ, インストール, 18
- 単一ユーザーシステム, インストール, 17

## て

- ディスプレイコンピュータ, 14

## と

- ドキュメント, アクセス, 8
- ドキュメントの索引, 8

## は

- パッケージ, 説明, 49
- パッチ, オペレーティングシステム, Oracle Solaris Studio 12.3 ソフトウェアに必要な, 53

## ひ

- 非 GUI アンインストーラ, 使用, 31
- 非 GUI インストーラ  
使用, 24, 25

## 非 GUI インストーラ (続き)

使用, 実行時ライブラリのみをインストールするには, 25

## 表示

リモート, アンインストーラ, 29

リモート, インストーラの, 14

ローカル, アンインストーラ, 29

ローカル, インストーラの, 14

## ま

マニュアルページ, アクセス, 26

## り

## リモート表示

アンインストーラ, 29

インストーラの, 14

## ろ

## ローカル表示

アンインストーラ, 29

インストーラの, 14

